

## ゆかたの着装から伝統文化の理解へと導く授業実践の試み

扇 澤 美千子	茨城キリスト教大学生生活科学部
川 端 博 子	埼玉大学教育学部
山 口 香	洗足学園中学高等学校 (非)
薩 本 弥 生	横浜国立大学教育人間学部
斉 藤 秀 子	山梨県立大学人間福祉学部

キーワード：ゆかたの着装、教育プログラムの開発、伝統文化、国際交流

### 1. はじめに

グローバル化社会が進展し異文化を理解し尊重する態度を身に付けることの重要性が増す中、現代社会における急速な技術の進歩や国際化・情報化の進展は、長い歴史の中で培われてきた生活技術の伝承の機会を減らし、自国の伝統文化への興味・関心を低下させてきた。このような背景のもと、2006年に教育基本法が改正され、「伝統や文化を尊重しわが国と郷土を愛するとともに、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が新たな教育の目標として規定された。これを受けて、学校教育では、国際理解や国際交流を推進するために、自国の文化への理解を深め異文化と共生できる資質や能力を育成することが求められ、教科横断的な内容の取り組みとして総合的な学習の時間が活用されることが多い<sup>1)</sup>。家庭科教育の中では国際理解に視点をあてた中学校食物領域の指導<sup>2)</sup>や絵本製作と読み聞かせを通した途上国支援<sup>3)</sup>の報告が見られる。衣生活分野においても、学習指導要領<sup>4), 5)</sup>には、和服の基本的な着装や衣生活文化に関心をもたせることが記載され、伝統・文化を尊重する態度の効果的な育成を目指した授業のあり方<sup>6)</sup>、「和」の生活文化を体験する授業<sup>7)</sup>などが報告され、参考資料も蓄積されつつある。われわれも、日本の「きもの」文化を次世代に伝承する家庭科の教育プログラムを開発することを目的として、中学校・高等学校の生徒を対象に、ゆかたの着装方法を学び、「きもの」文化に対する理解を深める体験型の授業を行い、実践報告にまとめた<sup>8)</sup>。これまでの報告から生徒たちが着装実習を楽しみ、きものの良さに気づいていくことが確認されている。

きものは、さまざまな行事、成長の節目などで着用されることが多く、日本の誇るべき伝統文化の一つとして諸外国の人びとからも憧れの衣服として高く評価されている。そこで、本研究では、ゆかたの着装を通してわが国の衣生活文化に触れ伝統的な衣装の良さを知ること、さらに、和装の価値を認識し自分の言葉で的確に表現し国内外への発信を試みることは、他国の伝統や文化を尊重し、異なる文化や歴史に敬意を払い共存することができる態度や能力の育成の一助となると考え、国際理解や国際交流に対する積極的な態度を引き出す授業のあり方を検討した。

授業実践では「きもの」文化に対する理解を深め、ゆかたの着装法について学ぶ体験学習として、ミニチュア着物（印刷物）の組み立て、帯結びの事前練習、ペア学習<sup>9)</sup>を取り入れた。着装後の自己評価および教師評価を実施し着装の出来ばえを評価し、生徒の授業への取り組み方や授業内容について検証した。授業時および授業後に振り返り調査を行いその結果を分析するとともに、ゆかたの着装感や「きものを着たことがない人や外国の人にその良さを伝える」ことを想定し

てゆかたの優れている点について記述させ、ゆかたの着装実践や授業内容が自国の衣装について自分の言葉で的確に表現し発信していこうとする態度とどのようにむすびついていくのかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

### 2-1 授業実践の対象

実践校は、神奈川県にある中学・高校一貫の私立の女子校である。英語教育及び国際教育に力を入れ、各学年に20名以上の帰国生が在学している。技術・家庭科は、1コマの授業時間は60分で、中学1年で2コマ、中学2年と3年で各1コマが設置されている。授業実践は実施校の家庭科教師が中学2年：A～F組の6クラス（有効生徒数249名）を対象に行った。授業の実施期間は、2010年6月21日～7月1日に2時間、夏休みを挟んで8月26日～9月6日に2時間である。被服実習室は、十分な広さがあり、三面鏡・空調設備も整い、視聴覚教材（スライド資料・DVD）の利用も可能であった。

### 2-2 授業実践内容

2010年5月中旬に、教師との打ち合わせ・実習室の確認のため協力校を訪問し、装備品・教材などの協力体制について説明した。実施内容は、中学生の発達レベル、1時間区切りの授業、夏休みを挟んでの実施という中断の影響を考慮し、生徒一人での着装は難しいと考え、「きものについて学び、友だちといっしょにゆかたを着てみる」を学習の目標とした。2時間目の帯結び終了後は夏休みとなるため、夏休みの課題の選択肢として「ゆかたの帯結び実践レポート」を設定した。

全クラスの授業を本実践の共同研究者1～2名、および共同研究者所属大学の学生がTAとして補佐し、S～LLサイズを取り揃えたゆかたと小物セット（半幅帯、腰ひも2本、伊達締め）約30着分、下駄10組を準備した。前半2コマでは、授業を参観し、必要に応じて視聴覚機器の操作と帯結び実習で補佐をした。後半の着付け実習では、着付けの写真撮影と準備・片付けを行った。着装の翌週、担当教師により、振り返り授業と調査の協力を得た。

#### 授業の流れと目標

1時間目 きものについて知ろう。（事前調査）

2時間目 帯を結んでみよう。

夏休み課題：ゆかたの帯結び実践レポートまたはバジルを利用した料理レポート

3・4時間目 友だちといっしょにゆかたを着てみよう。（自己評価）

5時間目 学習を振り返ろう。（振り返り調査）

実践の内容は、1時間目は、きものとゆかたに関する着用経験、伝統文化について問う事前調査の後、基礎知識としてきものの種類・特徴、格付けなどを講義した。きものに関する知識の中では、ミニチュアの着物を組み立てることで平面構成を学ばせる工夫がなされた。2時間目は、ゆかたの由来、小物と下着、部位の名称、男女の違いを説明し、ワークシートに記入させながら理解を促した。平成21年度の中学校での授業分析から帯結びの難航が予想されたため<sup>10)</sup>、教師が文庫結びを示範し、さらにDVD<sup>11)</sup>を用いて帯結びを再確認後、2人1組で帯結びの事前練習を行った。

夏休み後の3時間目は、ゆかたの着装、たたみ方の指導、写真撮影、調査票記入を行った。着付けは、困った時に助け合い学び合えるよう友だちといっしょに進めることとした。最初にDVDでゆかたの着付けの仕方を視聴させ、身長に近い2人が1組となって交代で体育着（半袖シャツ、ハーフパンツ）の上からゆかたを着装させた。自己評価は鏡を見ながら本人の判断を中心に友だちの意見も含めて評価するものとした。技能の評価には、マネキンに着付けたモデルを参考に示すよう指示した。ゆかたを着なかった生徒には写真撮影の間にたたみ方を指導した。たたみ方の指導はTAが担当する場合もあった。4時間目には着用者が交代して同様のことを繰り返した。

### 2-3 着装の振り返り調査

着装実習の翌週、生徒たちの関心・理解、興味関心の向上を把握するため振り返り調査を実施した。さらに、「きものを着たことがない人や外国の人に教えてあげる」という設定でゆかたの優れている点をワークシートに記述させた。

### 2-4 調査項目と分析方法

#### 2-4-1 着用経験

授業の最初に、きもに関する着装経験を問う事前調査を実施し、きものとゆかたの着装経験、目的、着付けを誰がしたか、きものやゆかたを着た時の気持ち、また、日本の伝統文化として思いつくもの、現在も継続中のもの、今後取り組みたいもの、日本が誇れると思うものについて尋ねた。

#### 2-4-2 着付けの評価と感想

自己評価の内容は、川端らの用いたもの<sup>9)</sup>と同様、まず、着付け技能に関するもので、「腰ひもをきちんと結んでいる」、「おはしより全体がきれいに整えられている」、「上半身の背中心がまっすぐになっている」、「えりが5cm程度抜けている」、「胸元の合わせ具合がちょうど良い」、「後ろすそが地面と平行になっている」、「帯がきつすぎたりゆるすぎたりしない」、「帯のリボンの形が整えられている」の8項目である。回答は、4. そう思う 3. ややそう思う 2. あまりそう思わない 1. そう思わないの4段階尺度とした。

次に、ペアの人や他の人からほめられたことや注意をうけたことについて自由記述させた。さらに、ペア学習の効果を考察するために設定した手伝いの程度については、「腰ひもを結ぶ」、「おはしりを整える」、「帯を巻く」、「帯を結ぶ」の4項目について、1. 手伝った 2. 相談を受けた 3. 手伝わなかったから選択させた。

着装後の感想としては、「背筋がのびて、姿勢がよくなった」、「歩き方が変わった」、「歩きにくかった」、「帯がきつかった」、「気持ちが高まった」、「優雅な気持ちになった」、「いつもと違ってみえる自分になった」、「きものの良さを感じた」、「時間が経っても着くずれず維持できた」、「立居振る舞いが自然体で行えた」、「今後、ゆかたやきもので外出したい」、「着付けが楽しかった」、「着付けが難しかった」の合計13項目について質問した。回答は、4. そう思う 3. ややそう思う 2. あまりそう思わない 1. そう思わないの4段階尺度とした。

教師評価は、生徒の着付けの技能とその評価レベルを考察するために設定したもので、共同研究者1名が、前面と背面の写真から読み取れる範囲で評価した。「胸元の合わせ具合がちょうどよい」、「前面のおはしりがきれいに整えられている」、「背中心がきれいに整えられている」、「帯の形が整えられている」、「裾線が整えられている」の5項目について、3. 良い 2. ふつう 1. わる

いの3段階尺度で評価した。

### 2-4-3 振り返り調査

実践授業終了後の振り返り調査では、関心、理解、興味に関して、「ゆかたやきものに関心がありましたか」、「ゆかたの着付けに関心がありましたか」、「帯の結び方が理解できましたか」、「ゆかたを一人で着ることができますか」、「ゆかたを一人でたたむことができますか」、「またゆかたを着てみたいですか」の6項目について、4. そう思う 3. ややそう思う 2. あまりそう思わない 1. そう思わないの4段階尺度から回答を得た。また、今後、着付けを練習したいかについては、4. とてもそう思う 3. そう思う 2. あまりそう思わない 1. そう思わないの4段階尺度の回答とその理由を記述させた。さらに夏休み中にゆかたを着てみたか否かと、一連のゆかたの学習を振り返って気づいたこと、楽しかった点、反省点、「きものを着たことがない人や外国の人に教えてあげる」という設定でゆかたの優れている点について自由記述させた。

### 2-4-4 分析方法

質問の回答は、基礎統計量と回答割合の集計で全体的な傾向を把握した。また、項目間の関係の把握には相関係数を用いた。解析ソフトには、SPSS Statisticsを使用した。また、自由記述についてはキーワードを抽出し、集計した。

## 3. 結果と考察

### 3-1 着用経験

生徒249名のうち97%（有効回答数は243名）がきものやゆかたを着たことがあると回答した。そのうち、七五三（94.9%）、正月（9.8%）、結婚式など（1.7%）にきものを着た経験があり、ゆかたは、祭り（82.2%）、花火大会（40.2%）、旅館など（47.8%）で着ていた。きものを着付けた者に関する複数回答では母が27.1%、祖母18.2%、その他プロの人などが63.1%で、ゆかたの着付けは母81.0%、祖母21.2%、その他プロの人などが4.7%と続くことから、きものはプロの着付けでもゆかたは家庭内で着付けされることが多く、着付け技能がある程度伝承されていることがわかる。

きものやゆかたを着たときの気持ちについては、7項目から当てはまるものに○を付ける形で回答を得た。着装経験のある生徒のうち、「歩きにくかった」59.6%、「帯がきつかった」53.0%、「うれしかった」42.4%、「気持ちが高まった」30.1%、「優雅な気分だった」22.0%、「姿勢がよくなった」22.9%、「身のこなしが変化した」11.0%と回答し、窮屈と感じたり動作に関するマイナスのイメージを抱いていたものの、気持ちの高まりや立居振舞いの変化も感じていたことがわかった。

### 3-2 日本の伝統文化に関する意識

事前調査の回答により、日本の伝統文化として思いつくもの、現在も継続中のもの、今後取り組みたいもの、日本が世界に誇れるものについての記述内容では、季節の行事（正月、ひな祭り、七夕など）、茶・華・書道、日本食（おせち料理、寿司など）、きもの・和装（きもの、ゆかた、下駄など）、伝統芸能（歌舞伎、能、狂言など）、工芸品・産業（織物、和紙、伝統工芸など）、遊び（たこあげ、かるた、コマなど）、祭り（夏祭り、盆踊り、花火大会など）、文芸（和歌、ひらが



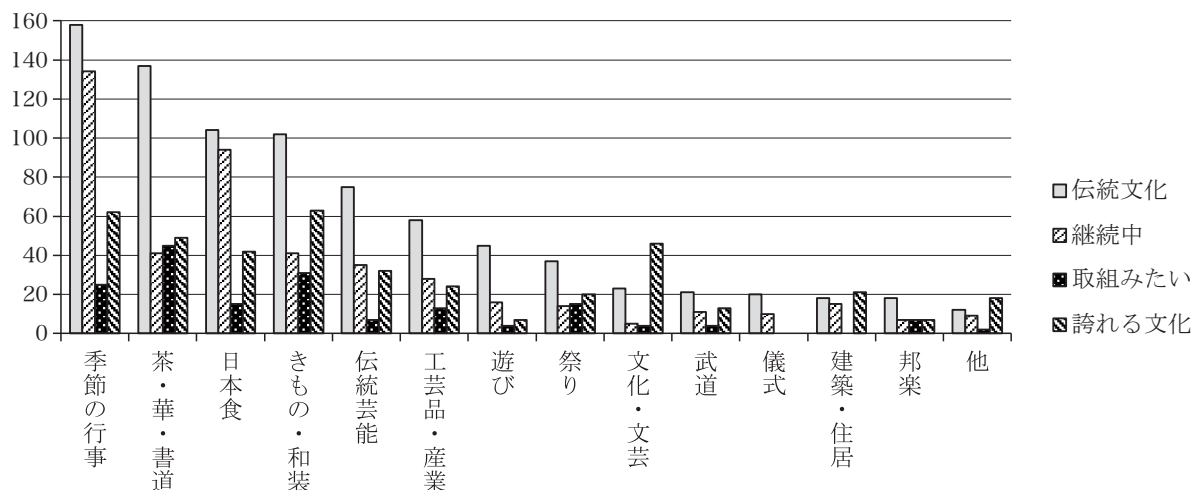


図1 伝統文化として思いつく内容

な、百人一首など)、武道(剣道、柔道、相撲など)、儀式(七五三、冠婚葬祭など)、建築・住居(寺社、畳、瓦屋根など)、邦楽(琴、三味線など)に分類した結果を図1に示した。まず、日本の伝統文化として思いつく言葉としては全634語の記述があり、季節の行事158語、茶・華・書道137語、日本食104語、きもの・和装102語、伝統芸能75語、工芸品・産業58語があげられていた。次に、現在も継続中のもの(全373語)としては、季節の行事134語、日本食94語、茶・花・書道41語、きもの・和装41語、伝統芸能35語、工芸品・産業28語であった。継続中の文化を記入するにあたり、伝統工芸(和紙、漆塗りなど)や歌舞伎などのように国の文化とみなされるものと初詣や寿司など身近な生活の中で継続されているものと両方の視点からの記述があった。さらに、今後取り組みたい伝統文化について(全144語)は、茶・華・書道45語、きもの・和装31語、季節の行事25語、日本食15語、祭り15語、工芸品・産業13語となり、身近な習い事として継承されてきた茶・華・書道や今回の学習でも体験することになったゆかたの着付けやきものに対して関心が高いことが明らかとなった。現代文化も含め日本が誇れると思う文化について(全294語)は、きもの・和装63語、季節の行事62語、茶・華・書道49語、文芸46語、日本食42語、伝統芸能32語となり、文芸としてアニメ、マンガ、オタク文化など、工芸品・産業として科学、IT企業、パソコンなどが新しく加わった。

以上のように、きもの・和装に関する記述は日本の伝統文化として思いつく内容としていずれの項目でも上位に位置し、本実践が伝統文化に触れ、理解を深めるために有効な内容であることがわかる。

### 3-2 着付けの自己評価と感想

着付けの出来ばえの自己評価の結果を図2に示した。全体として肯定度

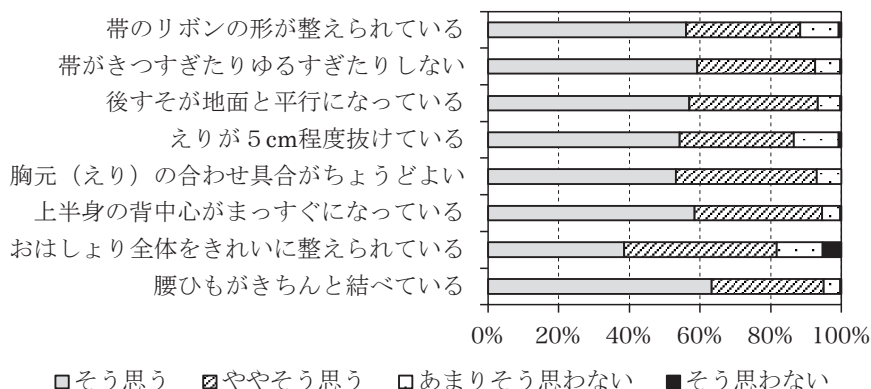


図2 着付けの自己評価

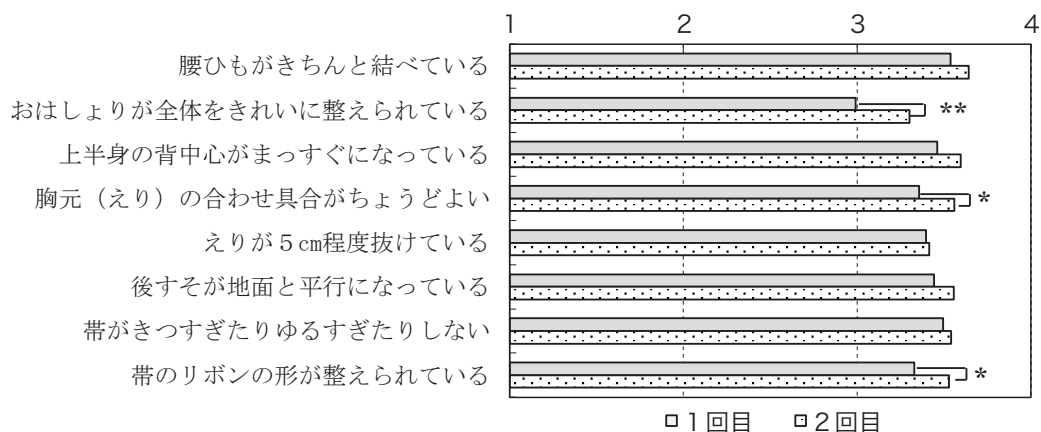


図3 着付け順と自己評価平均値の比較（t検定有意確率 \*\* $p < 0.01$ 、\* $p < 0.05$ ）

は高く、ややそう思う・そう思うが全体の8～9割を占めている。その中で、「おはしより」の肯定度はもっとも低く、川端らの指摘<sup>9)</sup>と同様、女性のきものの特性であるおはしよりや着丈の調整は難しいと感じているようである。また、着実習の順番によって自己評価の平均値を比較する(図3)と、後半に着装した生徒のほうがすべての項目で平均値が高く繰り返し学習した効果が認められた。特に、おはしよりを整えるに関しては前半と後半の差が大きく（有意確率 $p < 0.01$ ）、帯のリボンの形と続く結果となったことから難しいと感じている事柄に対してより繰り返しの効果が表れたといえよう。

### 3-3 ペア学習の効果

図4にはペア（他者）による手伝いの程度を示した。学習方法としてペア学習を推奨した結果、「手伝った」と「相談を受けた」を合わせるとどの項目も手伝いの程度は高い。「帯を巻く」で「手伝った」74.4%、「おはしより」でも71.2%となり、「相談を受けた」まで含めるとほぼ9割の生徒が互いに協力したことがわかる。また着実習の順番によって手伝いの程度を比較する(図5)と、後半に着装した生徒のほうがすべての項目でペアの相手が手伝った割合が多くなっていた。着装の順番が前になった生徒は自分の体験を生かしてペアの相手に対して手伝う、相談を受けるといった着付けに対する積極的な関わりを引き出されていることが明らかとなった。

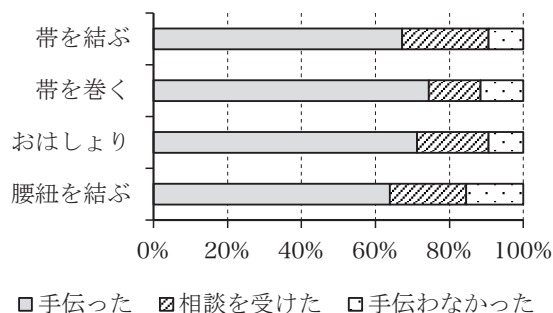


図4 手伝いの程度

これらのことから、ペア学習は、前半の授業で体験したことが後半の授業で友だちの求めに応じアドバイスする時や相手の着付けを手伝う時に役立つこと、また、繰り返しによって理解を深め、着付けに積極的に関わりより効率的に着装していることが考察された。

図6にはペアの相手やその他の人から受けた言葉がけについて、着た姿についてほめられたことと注意を受けたことの自由記述の内容を示した。ほめられたことについての記述(63.0%が記述)を分類すると「似合う」「かわいい」等、外観・イメージに関する内容の記述が最も多く、「うまく着れた」「リボンの形が整っている」「おはしよりがきれい」など出来栄・技能に関する点がほめ

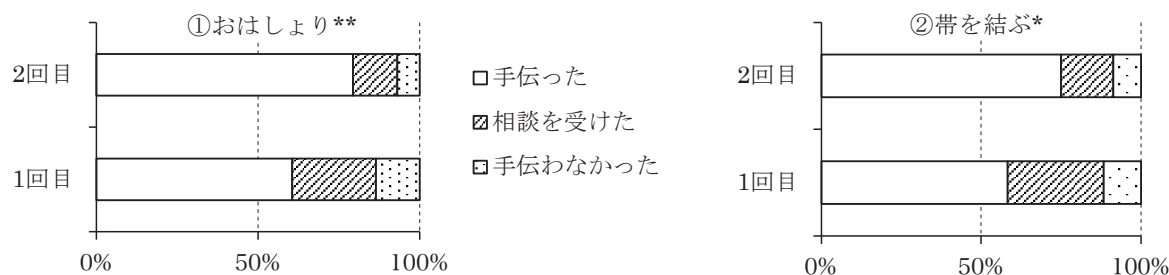


図5 着実習の順番と手伝いの程度（有意確率 \*\* $p < 0.01$ 、\* $p < 0.05$ ）

られていた。また、注意を受けたこと（68.7%が記述）については、「帯の結び方」「おはしより」「リボンの形」がうまくできていないなど技能面のコメントが多数あったが、「行儀が悪い」など取り組み姿勢の内容も記載されていた。実習中には、互いに褒めあい励ますことで気持ちを高め、時には注意を与えることでよりきれいに着付けができるようにともに学びあうことができていたことがわかる。特に、帯結びとおはしよりについては、多くの生徒がほめられるか注意を受けるかいずれかのコメントを受けており、着装の注目点であることが伺えた。

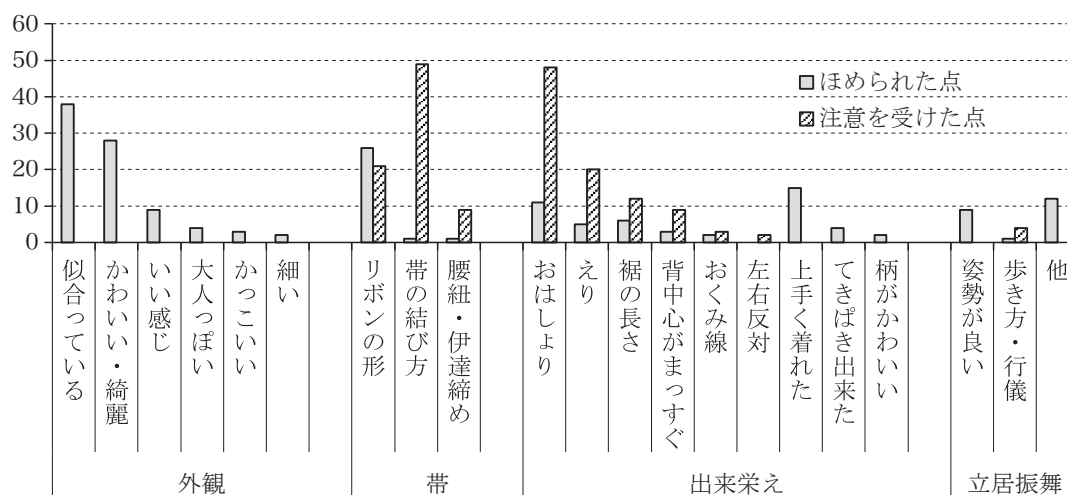


図6 他者から受けた言葉がけについて

### 3-4 着実習に対する感想

着実習に対する感想（図7）では、「姿勢がよかった」「楽しかった」「きものの良さを感じた」で全体のほぼ8割がそう思う・ややそう思うと回答しており、「着崩れず維持できた」は76%、「立居振舞が自然体」は68.5%と好意的な感想が多かったが、「歩きにくかった」は7割がそう感じ、帯結びに関しては、「帯がきつかった」と感じていた生徒はほぼ半数で、帯による圧迫感よりもゆかたによる動作のしにくさのほうをより強く感じたようである。また、88.2%の生徒が「着付けが難しかった」と回答し、楽しさやきものの良さを体感すると同時に難しさも実感していたことがわかる。

### 3-5 着付けの自己評価と教師評価の相互関係

着付けの自己評価（8項目）について相互の関係を相関係数によって検討すると、「帯がきつすぎたりゆるすぎたりしない」以外の項目については相互の関係は良好で、ほとんどの項目に有意な

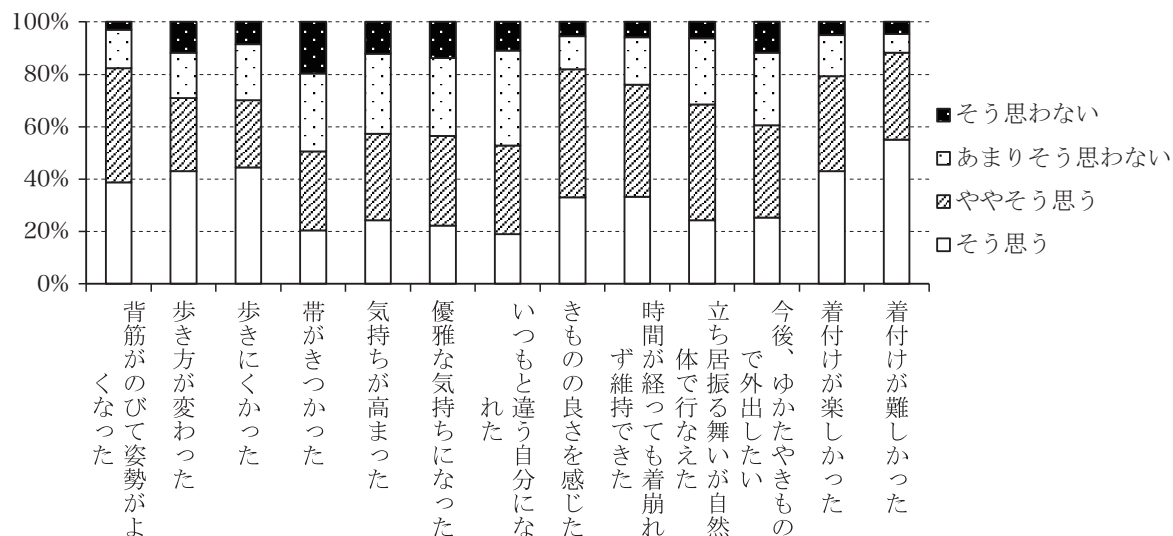


図7 着装実習に対する感想

相関がみられた。また、各自の自己評価の平均値を求め8項目平均として、他の項目との相関係数(r)を求めた結果、もっとも低い値となった「帯がきつすぎたりゆるすぎたりしない」では $r=0.54$ 、それ以外の項目でも $r=0.68\sim0.73$ と高い相関が認められた。

写真をもとに行った教師評価においては「裾線が整えられている(裾線)」の肯定度がもっとも低くよいと評価したのは54.7%で、「おはしよりがきれいに整えられている(おはしより)」はよい: 61.6%となり、その次に肯定度が低かった。「胸元の合わせ具合がちょうどよい(えり)」はよい: 83.3%で肯定度が最も高く、教師の評価と生徒の評価の肯定度には類似傾向があった。

教師評価の相互関係は、「おはしより」と「背中心」で $r=0.21$ 、「おはしより」と「裾線」で $r=0.14$ 、「おはしより」と「帯結び」で $r=0.12$ 、「帯結び」と「裾線」で $r=0.12$ の相関を示し、教師評価において各部の評価相互の関係はあまり強くなく、生徒の着付けは一か所がうまくできていても他のところもうまくできているとは限らなかった。

さらに、教師評価と生徒による自己評価の関係を検討すると、扇澤らが実施した着装実践<sup>12)</sup>の結果と同様に教師評価・生徒自己評価間の相関係数は全体として低く、教師評価を基準とすると、生徒たちは着付けの出来ばえを必ずしも正しく評価できていない可能性が示唆された。今後は、さらに写真や実物などを活用し、よい例・悪い例を示すなど、各自が着付けのポイントとなる事柄を十分理解したうえで実習に取り組み生徒の評価レベルを向上させる学習形態の検討が望まれる。

### 3-6 着付けの理解・関心度に関する振り返り調査

着装実習の翌週に実施した、着付けの理解・関心度に関する回答結果を図8に示した。着付けの理解度に関して、「帯の結び方が理解できたか」「一人でたたむことができる」は8割程度がそう思う・ややそう思うと回答し、多数の生徒がやり方を理解したことがわかる。「帯の結び方」において肯定度が高かったのは事前に帯結びを練習した効果の現れと考える。しかし、「一人で着ることができる」の肯定度は47%にとどまった。ペア学習の形態をとったことで、着付けに関わる時間、手助け・アドバイスの機会が増えたことで半数の生徒は肯定感を得ることができたが、そう思うと回答した生徒は8.6%で「一人で着る」自信を得るには十分な体験とは言えないようであった。



関心・意欲に関する回答では、「ゆかたやきものに関心がもてたか」で87.3%、「着付けに関心がもてたか」で83.7%がそう思う・ややそう思うと回答し生徒の関心は高く、88.6%が「またゆかたを着てみたい」と回答している。「今後着付けを練習したいか」との関係では、「帯の結び方が理解できたか」 $r=0.31$ 、「ゆかたやきものに関心がもてたか」 $r=0.39$ 、「ゆかたやきものに関心がもてたか」 $r=0.48$ 、「また、ゆかたを着てみたい」 $r=0.51$ の相関を示し、理解・関心が高い者は今後の練習へも前向きな姿勢を示す傾向がみられた。

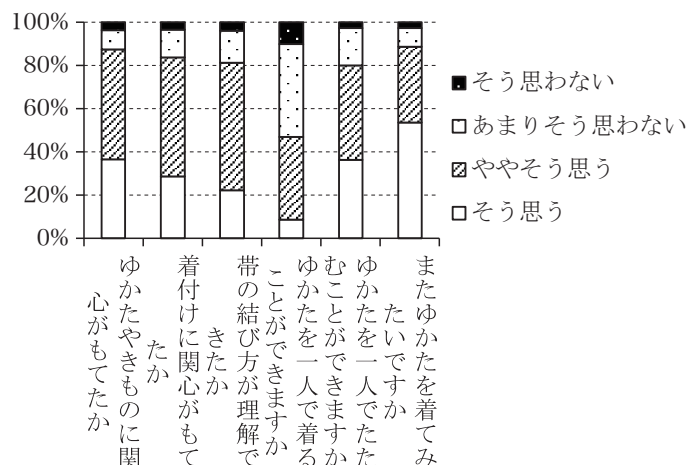


図8 着付けの理解・関心度について

### 3-7 振り返り調査に見られる生徒の気づき

一連のゆかたの学習を振り返って記載された、ゆかたを着てみて気づいたこと（図9）、楽しかった点（図10）、反省点（図11）に関する自由記述をもとに内容を分析した結果を示した。記載件数は、気づいたことに関して225件、楽しかった点は310件、反省点は322件である。

学習を通じて気づいたこと（図9）では、着装による圧迫感が最も多く、時間がかかる、暑いなどの否定的な感想（負の印象）が73件であった。腰紐・伊達締め・帯を締める体験は腹部に拘束感や圧迫感をもたらし、一連の作業手順の多さや理解が十分ではなかったことから時間がかかってしまったようである。一方、背筋が伸びる、綺麗に歩ける、かわいいなど自分自身についての変化についての気づき（好印象）が59件、涼しい、着心地が良い、軽いなど着心地に関してが29件、楽しい、気分が変わったなど気持ちの変化が20件となり、これらを肯定的な感想としてまとめるならば、生徒の多くがゆかたの着装について満足感や高揚感を抱いたことがうかがえる。また、

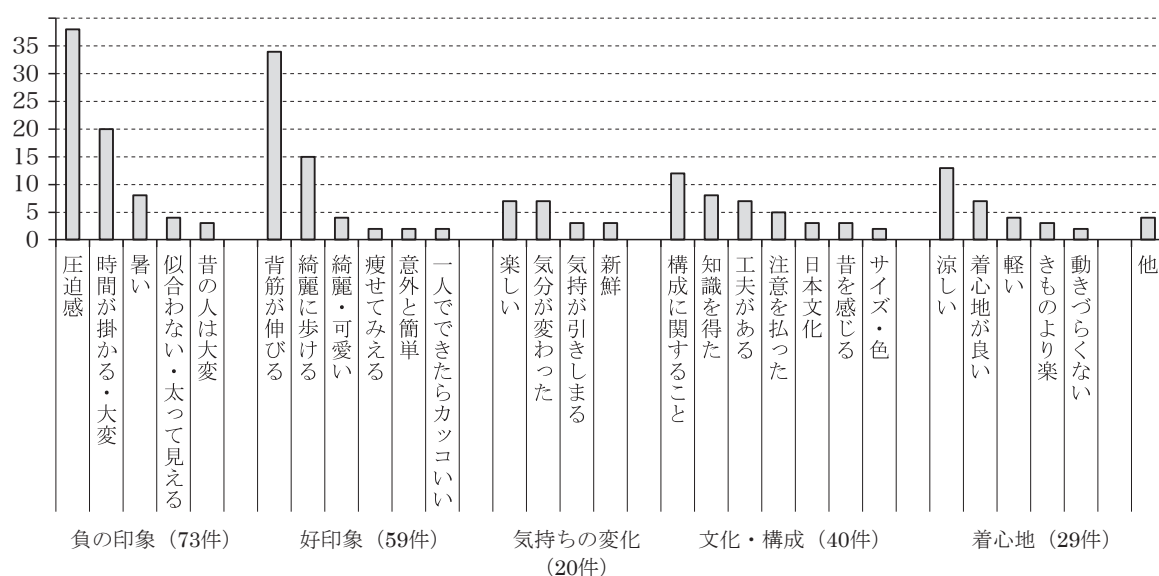


図9 着装後の気付き

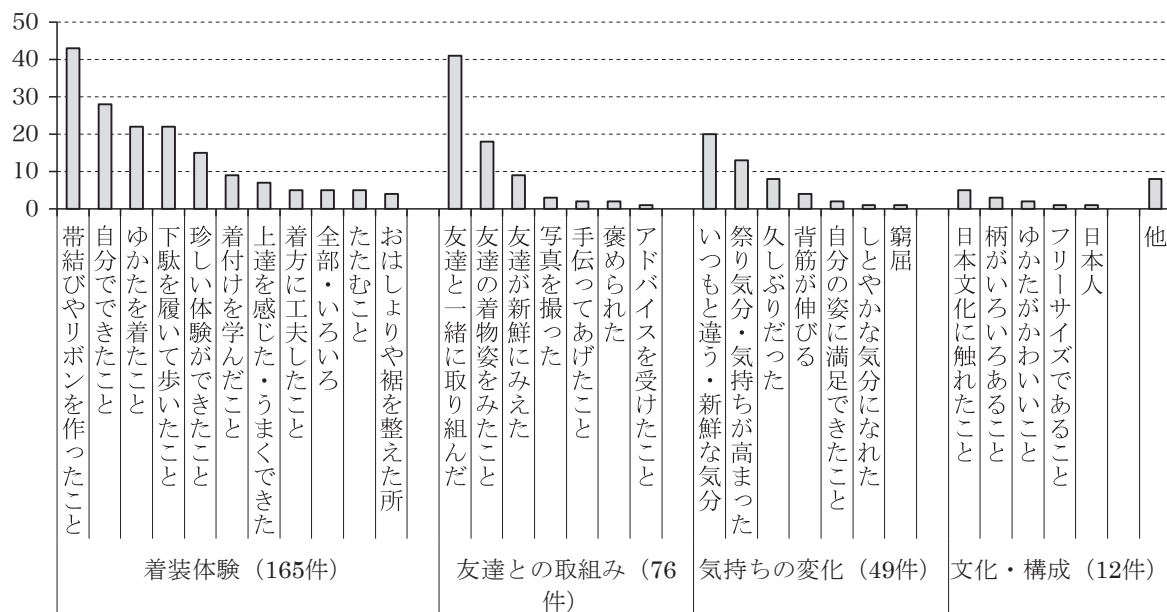


図10 楽しかった点

構成に関すること、知識を得たなど文化・構成に関しては40件となり、浴衣に対する知識の定着も見られた。

楽しかった点について(図10)は、着装体験に関わる記述が165件、友達との学習活動に関しても76件、気持ちの変化が49件、文化・構成に関わる事柄が12件となった。着装体験では、帯結びを含め自分で着ることができたことを楽しかった点に挙げる生徒が多く、体験学習の重要性がうかがえた。また、友達とともに学び、助け合う、認め合うなどペア学習がもたらす効果も十分感じられる結果となった。気持ちの変化の記述からは、生徒たちの高揚感・新鮮な気分・満足感などが感じられた。

反省点について(図11)は、帯結び(形・ゆるい)、おはしより、丈など着装の出来栄についてが200件、着装体験に関しては、やってもらった、手順がわからない、一人でできないなどが110件であった。着装体験は楽しかったと感じているが出来栄や技術的な習熟という点では達成度が低く反省点となった。また、楽しかった点、反省点ともに帯に関する記述が最も多く、帯のリボンの形がうまくできたかどうかは出来栄にも直結しゆかたを着る時の一番のポイントであることがわかる。

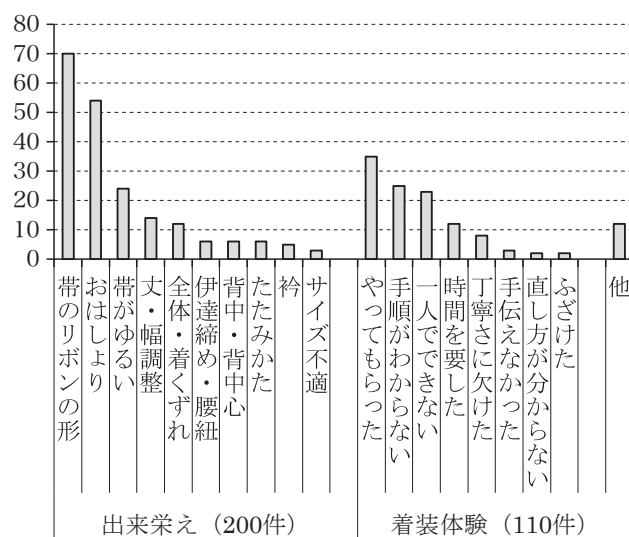


図11 反省点

### 3-8 きものの優れた点を発信する

本研究では、ゆかたの着装を通して自国の文化に対する理解を深め、異なる文化や歴史に敬意を払い共存することができる態度や能力の育成をめざし、着装実践後の振り返り調査では「きも

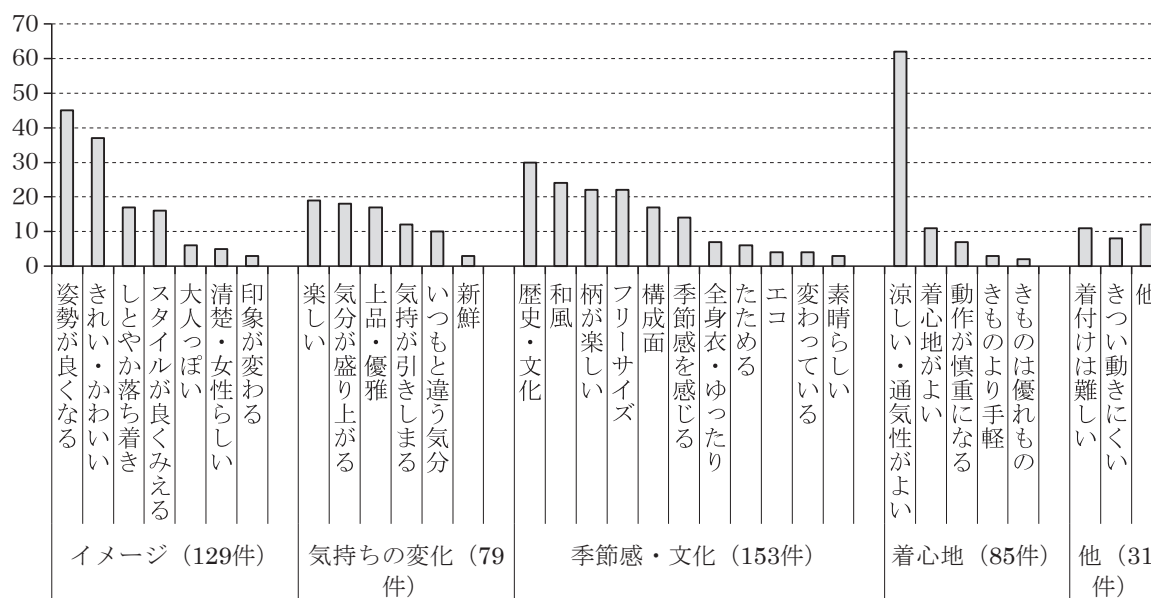


図12 優れた点

のを着たことがない人や外国の人に教えてあげる」という設定でゆかたの優れている点について自由記述させ、伝統的な衣装の良さを認識すること、さらに、その価値を自分の言葉で的確に表現し他者へ発信することを試みた。得られた記述内容の総数は477件で、川端ら<sup>9)</sup>同様、4つの観点から分類し、その結果について図12にまとめた。1つ目は姿勢がよく、かわいい・きれいといった外観イメージの向上に関するもの(129件)、2つ目は楽しい、盛り上がる、上品・優雅など気持ちの変化に関するもの(79件)であった。3つ目は季節感・文化に関するもの(153件)で最も件数が多く、ゆかたの特徴としてサイズ調整が容易であること(フリーサイズ、全身衣)、平面構成であること(構成面、たためる)、伝統を感じさせる要素を持ち合わせていること(歴史・文化、和風、柄、季節感)などが示された。これらは基礎知識としてきものの種類・特徴などを講義し、ミニチュアの着物を組み立てることで平面構成を学ばせ、ゆかたの由来、部位の名称、男女の違いを説明し理解を促した授業内容の成果と言えよう。4つ目は涼しい・通気性がよい、着心地が良いなど着心地に関するもの(85件)で、ゆかたの優れた点として涼しい・通気性がよいとの記述は62件と最も多く、ゆかたを実際に着用することで、きものとゆかたの構造の違いや着用する季節の特性などへの認識が高まったことが伺える。また、その他として、着付けの難しさや着装の拘束感についての記述も見られ、着用経験のない人にプラス面だけでなくマイナス面も伝えるべきだと考えた生徒が少数ながらいたことがわかる。このように本授業実践はゆかたの優れた点を認識し他者に発信するために有効であった。

#### 4. まとめ

本研究では、「きもの」文化に対する理解を深め、ゆかたの着装法について学ぶ体験学習として、ミニチュア着物(印刷物)の組み立て、帯結びの事前練習、ペア学習を取り入れた授業実践を行った。着装後、自己評価および教師評価を実施し着装の出来ばえを評価することにより、生徒の取り組みや授業内容について検証した。さらにゆかたの着装感やゆかたの優れている点について記述さ

せ、「きものの良さを伝える」ことへの実践授業の寄与について検討した。

日本の伝統文化として思いつくもの、現在も継続中のもの、今後取り組みたいもの、日本が世界に誇れるものについては、季節の行事、茶・華・書道、日本食、きもの・和装、伝統芸能、工芸品・産業、遊び、祭り、文芸、武道、儀式、建築・住居、邦楽に関する記述が得られた。きもの・和装に関する記述は日本の伝統文化として思いつく内容としていずれの項目でも上位に位置していた。

着付けの出来ばえの自己評価では「おはしより」の肯定度がもっとも低く、女性のきものの特性であるおはしよりや着丈の調整は難しいと感じていた。また、着装の順番に関しては、後半に着装した生徒のほうがすべての項目で自己評価の平均値が高かった。手伝いの程度の比較からは前半着装者が自分の体験を生かして積極的に着付けに関わっていることが明らかとなった。着装実習に対しては、好意的な感想が多かったが、ゆかた全体による拘束感をより感じていることもわかった。着付けの理解・関心度に関する回答結果からは、理解・関心が高い者は今後の練習へも前向きな姿勢を示す傾向が認められた。

生徒の着付けの自己評価では、教師評価・生徒自己評価間の相関係数は全体として低く、教師評価を基準とすると、生徒たちは着付けの出来ばえを必ずしも正しく評価できていない可能性が示唆された。学習を通じて気づいたことから多くの生徒がゆかたの着装について満足感や高揚感を抱いたことがうかがえた。楽しかった点では、自分で着ることができたことを挙げる生徒が多く、友達とともに学び、助け合う、認め合うなどペア学習がもたらす効果や生徒たちの高揚感・新鮮な気分などが感じられた。反省点では、出来栄えや技術的な習熟という点で達成度が低かった。「きものを着たことがない人や外国の人に教えてあげる」という設定でゆかたの優れている点について記述させた結果、授業内容やゆかたの着装体験に起因するものが多く認められ、着装実践はゆかたの優れた点を認識し他者に発信するために非常に有効であることがわかった。

われわれはこれまでゆかたに対する理解度の向上と正しい着付けの習得をめざし様々な形式でゆかたの着装実践を試みてきた<sup>9)、12)、13)、14)、15)</sup>が、どの実践でもゆかたの着装は生徒たちに高揚感、満足感、着る楽しさを感じさせ、興味・関心度の向上をもたらす結果が得られた。さらに、今回はペア学習による繰り返し学習が着付けの技能の向上、積極的な関わりにつながることを確認された。しかし、出来栄えの評価基準の明確化、着装がもたらす動作への拘束感を和らげることなどにはさらなる工夫が必要であった。

これらの問題を解決するためには、生徒たちが今後取り組みたい伝統文化として挙げた茶道や華道などと関連付けながらきものの利点を伝え、例えば、美しい姿勢や所作につながる着方・立居振る舞い方があることに気づかせたり、夏祭りや花火大会、お正月や成人式などの年中行事と関連付けながら日常生活の中できもの文化に触れる機会を増やし、きものやゆかたを見慣れる・着慣れることにつながるような新たな指導内容の導入が有効と考えられる。

さらに、各国の伝統衣装・民族衣装の紹介やきものとの比較などを組み込むことで、日本文化のみならず他国の伝統や文化への興味・関心を喚起し、知識・理解を深め、異なる文化や歴史に敬意をもって共存しようとする意識に結び付ける指導ができれば着装の体験学習を国際理解や国際交流に対する積極的な態度へとつなげていくことができよう。



## 謝辞

授業の実施においては平成22年度埼玉大学教育学部卒業生 松井萌恵さんに協力いただきました。また、本研究は、文化ファッション研究機構・服飾拠点研究：「きもの文化の伝承と発信のための教育プログラム」の一環として行われました。同研究の共同研究者、大妻女子大学名誉教授呑山委佐子先生、横浜国立大学教授堀内かおる先生に心より感謝いたします。

## 文献

- 1) 植木節子他 (2011) 国際教育の進め方に対する一考察 — “共生” における生徒の活動を通して— 千葉大学教育学部研究紀要 59 93-100
- 2) 山崎真澄他 (2011) 国際理解教育に視点をあてた中学校食物領域の指導 — 帰国生との比較から— 東京学芸大学紀要 総合教育学系Ⅱ 62 209-217
- 3) 柴静子他 (2011) 絵本の製作と読み聞かせを通してモンのこどもと結ぶ家庭科授業の研究 広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要 39 313-318
- 4) 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説技術・家庭編 59-60
- 5) 文部科学省 (2010) 高等学校学習指導要領解説家庭編 30-31
- 6) 清田礼子 (2010) 家庭科における伝統や文化を尊重する態度を育てる効果的な授業の在り方山梨県総合教育センター紀要 1-33
- 7) 堀内かおる他 (2011) 「和」の生活文化を体験する家庭分野の授業実践 日本家庭科教育学会第54回大会研究発表要旨集 16-17
- 8) 薩本弥生他 (2010) 「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発 文化女子大学文化ファッション研究機構服飾文化共同研究報告
- 9) 川端博子他 (2013) ゆかたの着装を題材とする授業実践の試み 日本家庭科教育学会誌 56 (2) 78-89
- 10) 薩本弥生他 (2010) 「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発 文化女子大学文化ファッション研究機構服飾文化共同研究報告 18-23
- 11) 薩本弥生他 きもの文化の伝承と発展のための教育プログラム  
<http://kimono-bunka.ynu.ac.jp/>
- 12) 扇澤美千子他 (2012) ゆかたの着装を題材とする授業実践の試み 少人数制を導入した授業の効果 埼玉大学紀要 教育学部 61(2) 1-14
- 13) 薩本弥生他 (2013) ゆかたの着装体験を含む教育プログラム開発をめざした中学校技術・家庭科での授業実践 日本家庭科教育学会誌 56 (1) 14-22
- 14) 扇澤美千子他 (2013) ゆかたの着装体験を組み込んだ総合的な学習の時間の授業分析 埼玉大学紀要 教育学部 62(1) 1-12
- 15) 薩本弥生他 (2013) きもの文化の伝承をめざしたゆかたの着装を含む教育プログラム開発のための中学校技術・家庭科での授業実践 教育デザイン研究 4 35-44

(2014年3月31日提出)

(2014年4月18日受理)

# **An Approach to Implement Wearing of the Yukata in Classes to Promote the Understanding of Traditional Japanese Culture**

**OUGIZAWA, Michiko**

College of Life Science, Ibaraki Christian University

**KAWABATA, Hiroko**

Faculty of Education, Saitama University

**YAMAGUCHI, Kaori**

Senzoku Gakuen Junior High School • High School

**SATSUMOTO, Yayoi**

College of Education and Human Sciences, Yokohama National University

**SAITOH, Hideko**

Faculty of Human and Social Services, Yamanashi Prefectural University

## **Abstract**

This is a report on class lessons that were conducted to deepen understanding for the “kimono” culture where students learnt about the wearing of the Yukata through assembling of miniature kimonos, prior practice to tie the obi end and pair learning. We analyzed the results that were investigated during class and examined the results of the questionnaire that were given to the students to describe their impressions on wearing the Yukata and what they thought was the superior points of the Yukata.

From the results to the questionnaire, there were many favorable impressions on wearing the kimono, but we also noticed that they felt a little restricted by the whole experience of the Yukata. It was recognized that those who expressed a higher degree of understanding and interest had the tendency to indicate a positive attitude for future participation. We found that the students experienced feelings of elation, newness, and satisfaction through the learning practice and that pair learning was effective in learning to share, help and recognize each other. When asked to describe the superior points of the Yukata through the question, “How would you convey it to a foreign person or a person who have never worn a kimono,” many described it based on their wearing experience of the Yukata and the class contents. We found the wearing practice of the Yukata was very effective in recognizing the superior points of the Yukata and in trying to convey the concept to others.

**Key words** : Wearing of the Yukata, Development of education program, Traditional culture, International exchange